

皆島万作先生からの頼り、1987年ロスアンゼルスからパリへ 皆島万作

桜井さん。私も日本を離れて、もう20年が過ぎました。一所懸命にはなれなくて10年も同じ所にいれば落付かなくなるたちで、二度目のアメリカも、その10年が間近です。家庭とは縁のない身軽さもあって、今年の秋口にはここを去ります。

いままで何十年か美術といわれるものとかかわって、今更なんだかとんでもない勘違いの人生をつっぱして来たような気がします。近頃やけに多くなった回顧展や復古調のせいでもありますまいが、折りにふれ昔の事など思い出します。そして、ふりむけば、いつもあなたがいます。

いつ頃だったのでしょうか、あなたや九州派の人達との接触が始ったのは。あらゆる分野で熱気をはらんだ1960年代の前ぶれのように東京では読売アンデパンダン展を場にネオ・ダダ旋風が吹きあれ、大阪では具体がアンフォルメル旗手として活動している時期でした。そして九州では九州派のメンバーを中心として、1956年の福岡市での街頭展を皮切りに、読売アンデパンダン展への集会殴り込み、全九州アンデパンダン展、そして1962年の“英雄たちの大集会”とエネルギーな行動が展開されていました。その行動は、前衛美術とは無縁に近かった九州に、その足場を確立に定着させていきました。

その頃、私は事あるごとに、九州派の活動は参加さしてもらいましたが、九州派を横目で意識しながら、大牟田という田舎町で、友人達と語り“新現実集団”なるグループをつくり、ネオ・ダダとは違って否定を媒体としたものでもなければ、土着を目的としたものでもなく、創造という名のもとに、文芸、映画、美術といった雑多なジャンルの交流を通して、それぞれの個性は尊重しながらも、その総合によって個性の超克が可能かといったようなささやかな気炎などあげていました。

前衛美術の実験、展開の場として、数々の問題を次期世代に提起しながら読売アンデパンダンも終りをむかえましたが、その余韻もおさまらないまま、大げさに云えば60年代初めの激動の時期を経て、年月あなたはサンフランシスコにそのあとを追うように、私は65年4月、同じアメリカのロスアンゼルスに渡りました。よほどあわただしかったとみえて、しばらくはお互いに連絡もつかず消息不明でしたが、その頃佐賀大学教授で、美術評論も手がけていた岸田勉氏からの手紙で、あなたの住所や、九州派のオチオサム、米倉徳氏らが、シスコにあなたを訪れたことなどを知りました。

それから、年あなたの二度目の渡米の時だと思います。連絡をうけて、ロスのサンペドロ港に出迎えに行きました。その船中ですでに大ぜいの仲間が出来、その中の幾人かの人達と我が家に直行し、リビングルームが一ぱいになったのを憶えています。

再びシスコに戻ったあなたは、そこに居を構え、ヒッピー華やかだった街のド真中に、コンニャクコミュニオンをつくり、創作活動のかたわら、各国の作家・詩人たちとの交友をもちコンニャク”の名は各地に拡がりました。10 数年を経た今日でも、場所やカタチは変わっても、コミュニオンとしての重要な役割りを果しながら、“コンニャク”はなお引継がれています。

ある時は、ロスの CAL・ART の日本人学生が、卒業制作として校舎正面の斜面に "A" 文字を長さ 60 米、巾・深さとも一米の溝を掘り、その中に街々からあふれ出た廃品を入れ、京都の "大文字" よろしく、夜に火をはなつとといったイベントを計画していました。けれども具体的な方法で行詰り、私に相談に来た時、たまたま、刀根康尚氏同道で家に立寄っていたあなたは、早速その役を買って、刀根氏、その頃 CAL ART で教鞭をとっていたアラン・カブローをはじめ、多くの協力者を得て、数日の徹夜でこれに応えました。発表の当日、早朝から三台のトラックによる街のクリーニングイベント、デリバリーイベント、それを追う 16 ミリカメラ、数台の消防車の見守る中、夜空にクッキリと "A" の火文字を浮びあげました。

各地にさまざまな話題を提供しながら、あなたはシスコを去り、パリーに移住しました。そこでもあなたは、周囲に集る若い人々の核となり、その輪を徐々に広げていったようです。あなたがたの企画したグループ展に参加するため、私はあなたのアパートに厄介になりましたが、集まる人たちに、九州派の人たちと同質のたたずまいをみてなつかしく思ったりしました。丁度その折、日本から吉村益信氏も来ており、パリー在住の工藤、江原氏らの間で 1960 年代展の企画のことなど話題になりました。それは、1975 年形を変えてアーティスト・ユニオンの名称で発足し、世界各地に、支部、連絡所が設置され、ロスでもこれに呼応して、創作者のコミュニケーションの場を設定し、20 名~30 名のメンバーにより "Creative Communication works of Los Angeles" (通称クリコミ) が結成されました。1976 年、サンフランシスコで行われたアーティストユニオンの JAPA・NOW には、シスコのメンバーと共に全員参加しています。

私は 1975 年の個展を潮合いに 2 年間の予定でインドへ旅立ちましたが、数ヶ月で病を得、一時日本での治療を余儀なくされました。1 ヶ年半ばかりの滞在でしたが、ユニオン福岡支部は九州派の人々が中核となり、月一度ぐらいの割で例会がもたれ、これに私も参加し

たりして、10 数年という空白が、あつと云う間に埋ったりしました。市美術館の新設で、設計についての作家側からの要望問題などもからみ、かなり熱の入った討議ももたれました。パリと日本を往復している筈のあなたが、いつもそこにいたような錯覚を今でももっています。

1977 年私は再びロスへ、時折りの帰国のたびに、パリから日本へ来ているあなたに逢ったり、すれちがったりで 10 年経ちました。

30 年を越えるあなたとのつき合いを振りかえって思うことは、九州派をはじめ、シスコでもロスでも、そしてパリで、あなたがオルガナイズ、もしくは、かかわった数多くのグループ運動は、輝しき前衛美術の集団というより、仲間同志の連帯感に支えられた共同体のようなものを感じさせます。あなたのグループに対するケタはずれの愛情と自己を無視した献身的な奉仕は、傷の痛みを知るもののみのもつやさしさだと思われま

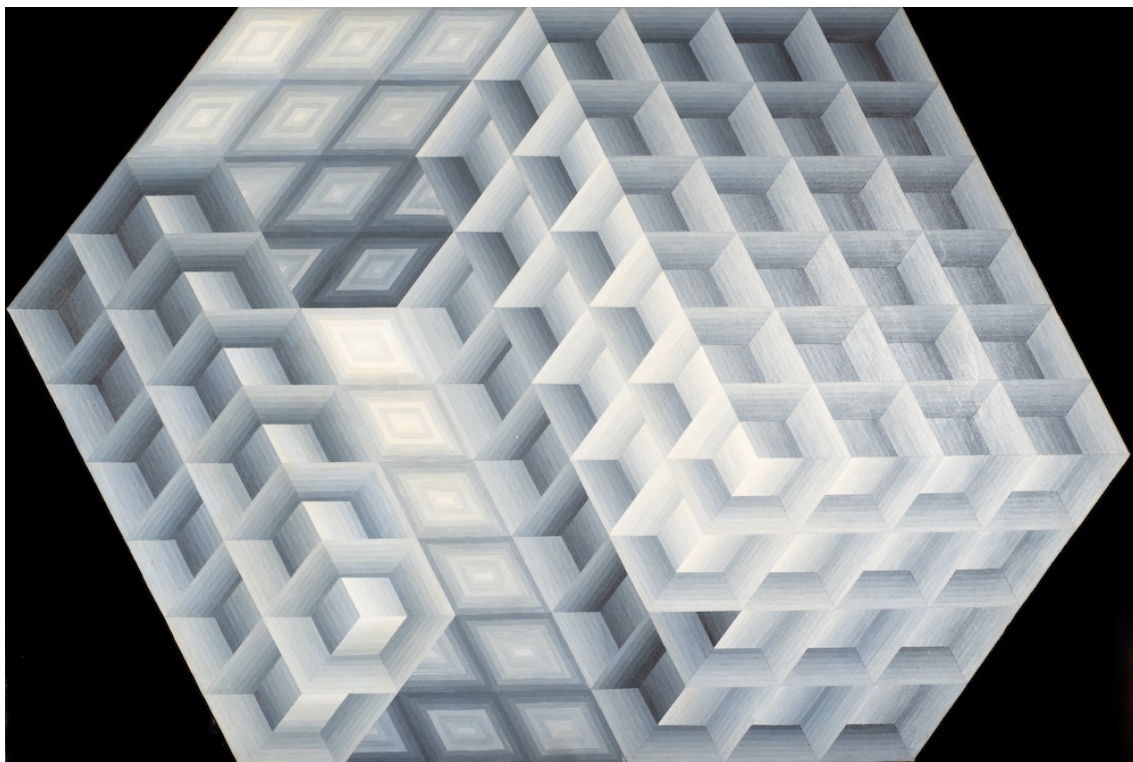
私はかつて石炭産業に不況の風が吹き始めた 1940 年末から 3 年あまり、三菱のある炭坑で常任書記長をつとめたことがあります。若い時だったせいもあるかも知れませんが、思想といった大それたものではないにしても、それは何年経っても心のどこかに後遺症となって残るものようです。

あなたがシスコに去るまで籍をおいていた西日本新聞社は、その当時、ストそしてロックアウトと数ヶ月に亘る激しい労使の攻防が展開されていました。あなたは労組の としてその波をもろに浴びてきた筈です。外では朝鮮戦争、国内では安保、そして地元九州では筑豊炭坑が閉山にさらされ、大牟田では労使の存亡をかけた三池争議が行われているといった状況の中で、あなたはあなたがおかれている背景をいやという程身近に感じていたと思います。あなたのオルガナイザーとしての組織論の中には、芸術運動といったものだけではなく、労働運動の中に培われた実践と体験が根強くあるようです。

集合離散のはげしいグループ活動で九州派が他のグループに対してきわだっているのは、論理や運動を越えた人間関係にあると云えます。九州派にかぎらず私の知っている多くの所で、あなたはそのようなコミュニケーションの場をつくって来ました。幾年ぶりかにおとずれる故郷で、いつも時間や距離を感じさせない九州派の人々との交歓が、他国に住む私にどれだけ安らぎと励ましを与えてくれるかを、そのたびに身にしみて感じます。

歴史的には九州派は、前衛美術の貴重な存在として残るでしょうが、人と人との結びつきは、記録を越えて存続する筈です。

私もあなたの周辺にいて、あなたが投げたコミュニケーションの輪の拡がりのなかに、数多くの作家や友人となった得難い人々との出逢いを持ちました。そして、それが、今私のもっているすべてだと云えます。ここ(ロス)を去ってどうなるか、先の事はわかりませんが気楽にやっていくつもりです。いままでありがとうございました。これからもよろしく願います。落つきましたら連絡いたします。



皆島万作 1350x910mm